



内と外一筆字

横井延長著

全

ル 4  
4908





路  
稿

櫻井敬長著併書

置賜縣管  
內地誌畧

寸心錄  
卷之三

明治九年

五月

九里忠兵衛藏版



門ル  
號4908  
卷

晴西雨亭樓主人



物に本末有りといひて理りの中其  
理りの極たる處にそはちをすま  
く末にのこる世の人をたはさまふ者の  
飛ぬにあら侍せぬの人の起りかゝり  
西洋の人をもちては理りを弄る  
本末の界階を設てをりては  
多るに花くをりて梅井をたは  
のまひの本末を誤りては



物まで公にはうらまへしるゝの  
ひまに一善をも 徳信里の志をいふ  
書紙を何とぞ読めこゝろの夏編  
瓢の何の邊にハハの漸何れ村くれの区  
にハくれ乃山くれの川をさそくもの  
きれそ昔里への一里習ひてあんと  
あしせしはまのいそくそくそく  
いそをさしおほゆるいそくそく

たのしみとて 志強志弱くしをり  
福いそものくぬも 明のそく  
あつとさあめり持たぬのこをぬ  
のふゆるゆゆ かのこは海のぬゆ  
のぬハハとくあく東の京の人あふ  
明治九年世といふ年の春

山宮成一謹誌





皇朝沿革畧記

神代

天之御中主神

高御産巢日神

神産巢日神

宇麻志阿斯訶備比

古遲神

天之常立神

国常立神

豐雲野神

以上七神皆独神

宇比地迺神

須比地迺神

甬枝神

活我神

意富斗能地神

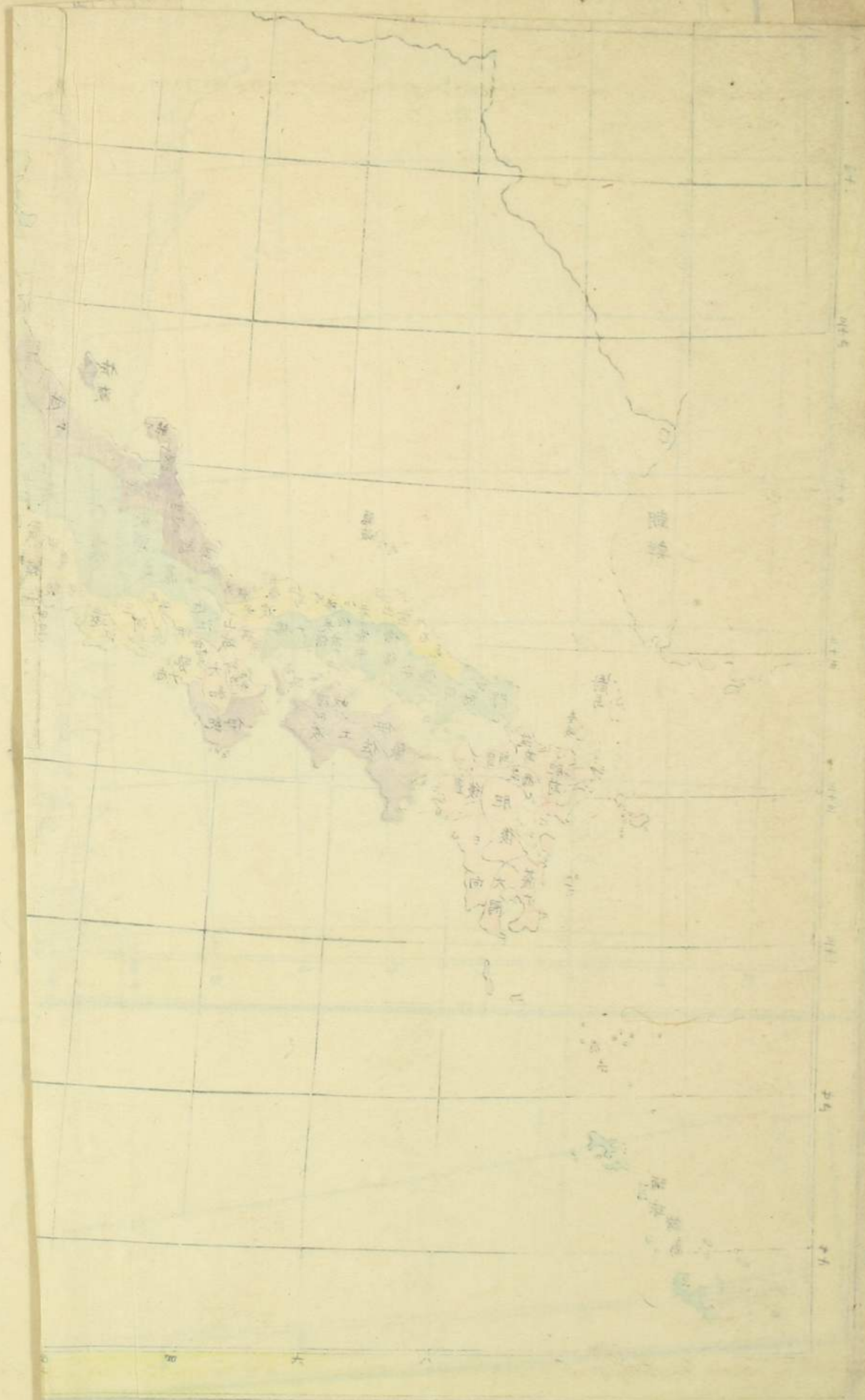
天斗乃赤神

於母陀瓊神

阿夜河志古泥神

伊邪那岐神

伊邪那美神



里能志雷邊

夫と日乃本此切續ち亞細

亞の中に獨立一萬古不易

延一帝國往昔

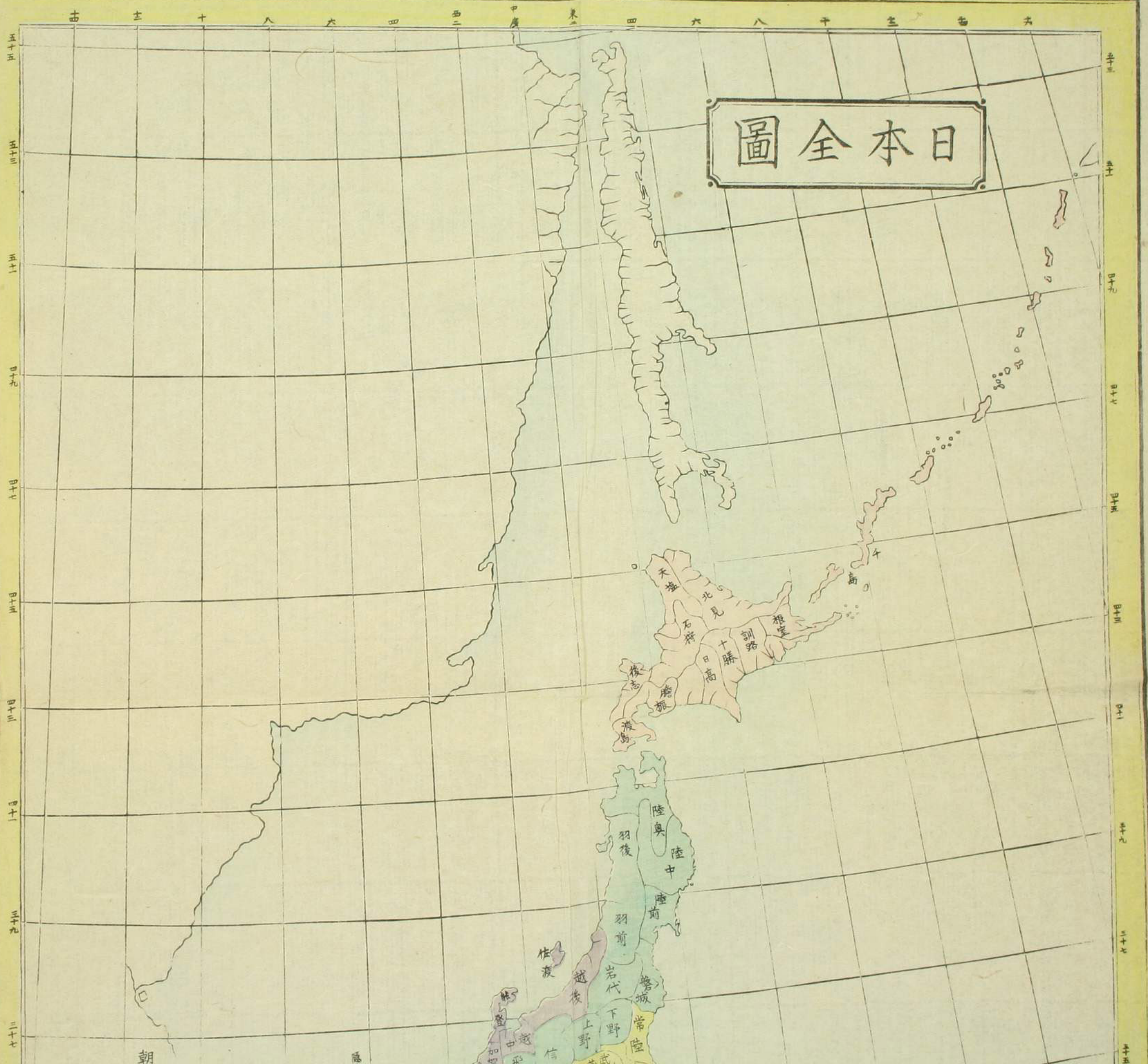
神武の創業より歳を經







日本全圖



五十五  
五十三  
五十一  
四十九  
四十七  
四十五  
四十三  
四十一  
三十九  
三十七

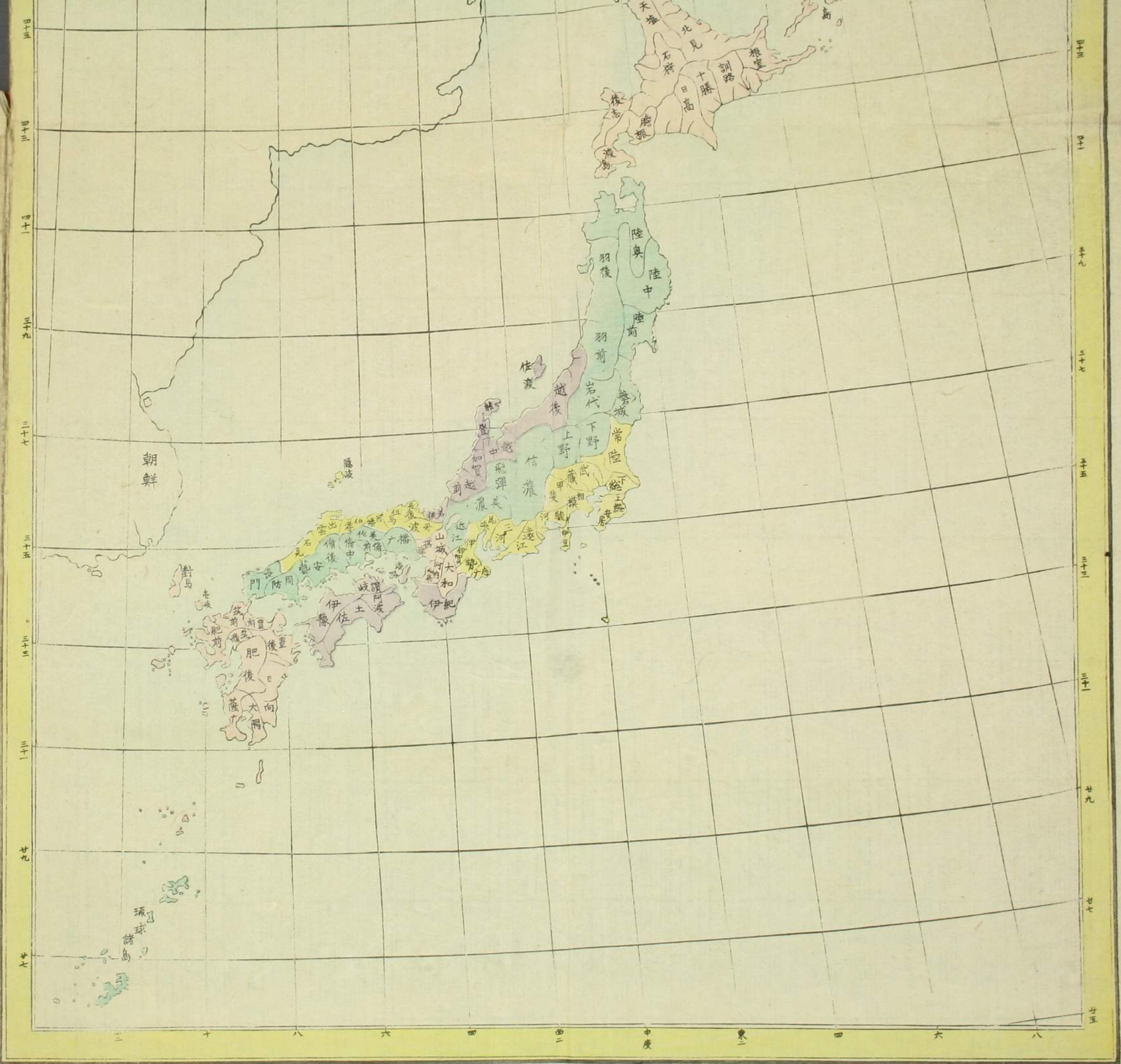
五十三  
五十一  
四十九  
四十七  
四十五  
四十三  
四十一  
三十九  
三十七

西 十 八 六 四 二 中 東 四 六 八 十 五 六

朝

海





三十一  
三十三  
三十五  
三十七  
三十九  
四十一  
四十三  
四十五

二十九  
三十一  
三十三  
三十五  
三十七  
三十九  
四十一  
四十三

二 四 六 八 十 二 四 六 八 十

朝鮮

大津  
石見  
日高  
十勝  
羽後  
陸奥  
陸中  
陸前

佐渡  
越後  
岩代  
上野  
下野  
常陸  
信濃  
武蔵  
甲斐  
相模  
河内  
近江  
美濃  
飛騨  
越前  
加賀  
前越

對馬  
肥前  
肥後  
日向  
大隅  
薩摩  
伊豫  
土佐  
阿波  
大和  
河内  
近江  
美濃  
飛騨  
越前  
加賀  
前越

琉球  
諸島



以上十神陰陽稱

生神

天照大神

天之忍穗耳尊

天彦火瓊杵尊

彦火々出見尊

彦波瀲武鸕鷀草葺

不合尊

人皇

神武 葺不合尊の

御子帝日向高千

穗の宮より起て

海内を一統し都

を大和橿原より定

め給ふ

綏靖 神武帝御子

安寧 綏靖帝御子

懿德 安寧帝御子



伊勢神宮

孝昭 懿德帝御子

孝安 孝昭帝御子

孝靈 孝安帝御子

孝元 孝靈帝御子

開化 孝元帝御子

崇神 開化帝御子

四道 崇神將軍を置

皇之知

事武千五百一拾餘年

皇統一百武拾二の代

知 食

大君此惠より生る民草

其数三千五百萬邦

長きは五百海里幅は三千

有餘里より一平余里なる

畿内八道

八拾四州城分轄を三府

五拾九縣乃外帳第

皇之知

二



垂仁 崇神帝御子  
 天照大神を伊勢  
 五十鈴川上よ鎮  
 座を  
 景行 垂仁帝御子  
 日本武尊東夷と  
 平く  
 成務 景行帝御子  
 始めて大臣の職  
 と武内宿禰よ任  
 を国郡よ造長縣  
 道よ稻置と置き  
 国境を定む  
 仲哀 日本武尊御  
 子始めて大支武  
 以て大連よ任を  
 神功 仲哀帝の后  
 氣長宿禰の御子

三韓を征む  
 應神 仲哀帝御子  
 百濟國の王仁論  
 語及千字文を献  
 仁德 應神帝御子  
 民の貧を憐れ三  
 年租を免む  
 履仲 仁德帝御子  
 及正 履仲帝同母  
 弟  
 允恭 及正帝同母  
 弟姓氏を定む  
 安康 允恭帝御子  
 雄略 安康帝同母  
 弟紀小弓新羅を  
 討川  
 清寧 雄略帝御子

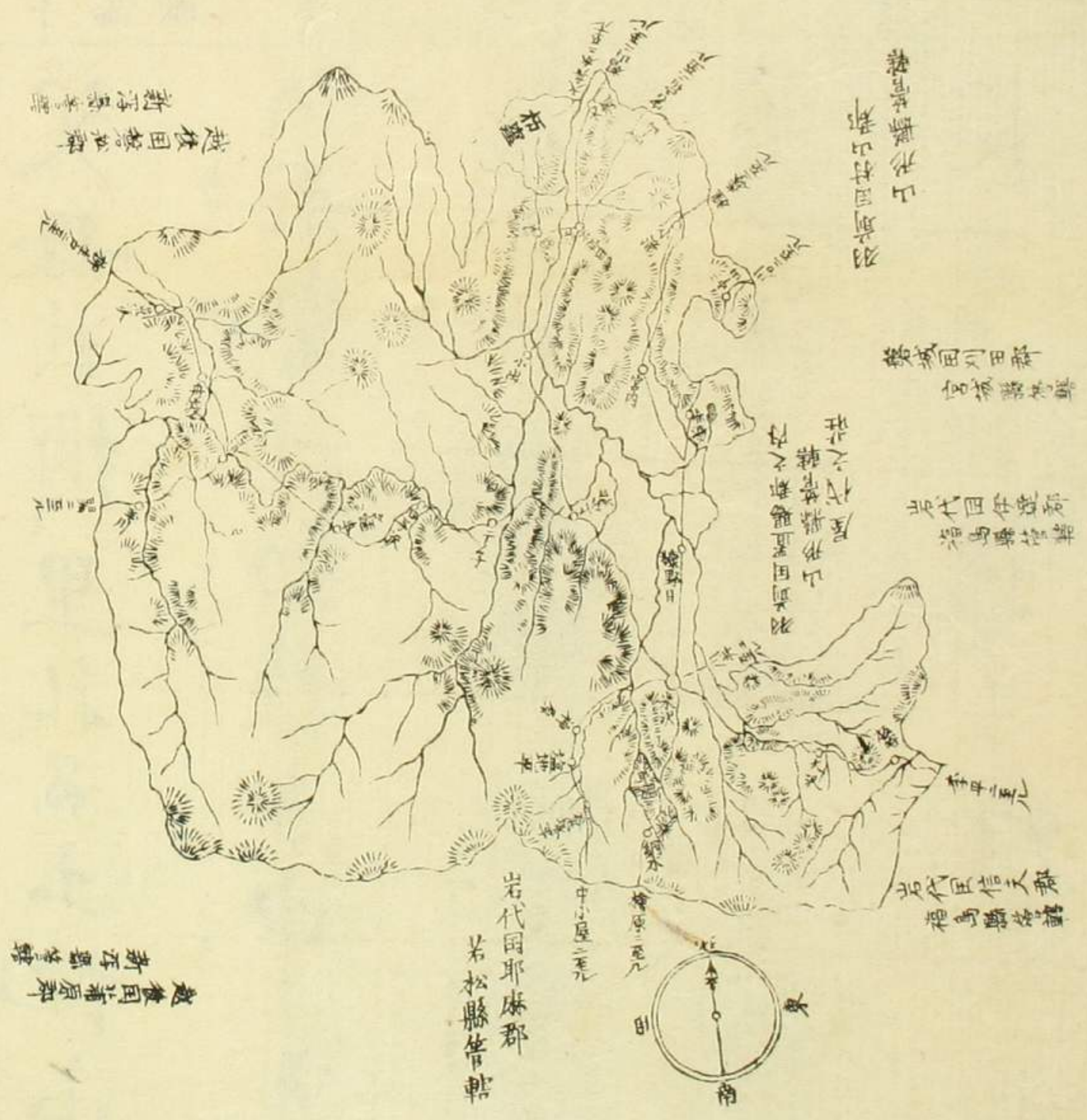
くる開拓使琉球藩を南  
 海を造る難まきし島嶼を  
 利假々嶋嶼其末々地  
 理を知ぬと日乃本島國よ  
 生れし甲斐も無し殊更

父母は郷里にる土地山川  
 の形勢は幼稚き中不學  
 厚く中置賜縣を管内を  
 茲に輯めて童子よ地理の  
 初學を教導すの母

里之知



置賜縣管轄全圖



置賜縣乃管轄を東山道

能羽前あふ國東の片

遠り東西大約十七里七町

有餘乃直徑を南北疆

八拾三里二十三町あふ巾に

顯宗 履仲帝孫  
 仁賢 顯宗帝同母弟  
 武烈 仁賢帝沖子  
 帝性 殘忍天下暴政之苦む  
 繼體 應神帝玄孫  
 安閑 繼體帝御子  
 宣化 安閑帝同母弟  
 欽明 繼體帝御子  
 百濟國仁像經論を獻て燕我稱目請て之と受く  
 敏達 欽明帝御子  
 燕我馬子仁を信して物部守屋と争ふ



用明 欽明帝御子  
 崇峻 欽明帝御子  
 馬子人をして帝  
 を弑せしむ  
 推古 用明帝妹  
 厩戸皇太子より  
 冠位六品十二階  
 を定の憲法十七  
 を頒つ小野妹子  
 隋国に使者  
 舒明 敏達帝孫  
 皇極 舒明帝后  
 中大兄命 大智鎌  
 足に諱り入鹿父  
 子を誅す  
 孝徳 皇極帝同母弟  
 始て年号大化と  
 立つハ有百官々

漢衢 一ま百世亭 邨落 二ま百五  
 拾ま三ま住まの家 數ま八ま武ま万ま貳ま千ま九  
 百ま三ま十八ま戸まの 人 眞ま凡ま拾ま三ま萬  
 一ま子ま九ま不ま拾ま口ま也 熟ま々 拙ま石まを  
 南ま六ま高まく 北ま低まく

顯宗 履仲帝孫  
 仁賢 顯宗帝同母弟  
 武烈 仁賢帝御子  
 帝性 殘忍 天下 暴  
 政ま苦まむ  
 繼體 應神帝玄孫  
 安閑 繼體帝御子  
 宣化 安閑帝同母弟  
 欽明 繼體帝御子  
 百濟 國 仁像 經 論  
 を 獻まと 蘇我 稻 目  
 請まて 之まと 受まく  
 敏達 欽明帝御子  
 蘇我 馬子 仁 信  
 して 物部 守屋 と  
 争まふ

置賜縣 乃 爰 籍 東山道  
 能羽前 乃 國 東 之 長  
 遠まり 東 西 大 約 十 七 里 七 町  
 有 餘 乃 直 徑 々 々 南 北 疆  
 八 拾 三 里 二 十 三 町 亦 不 中 に



用明 欽明帝御子  
 崇峻 欽明帝御子  
 馬子人をして帝  
 を弑せしむ  
 推古 用明帝妹  
 厩戸皇太子より  
 冠位六品十二階  
 を定の憲法十七  
 を頒つ小野妹子  
 隋国に使者  
 舒明 敏達帝孫  
 皇極 舒明帝后  
 中大兄命 天智鎌  
 足に謀り入鹿父  
 子を誅す  
 孝德 皇極帝同母弟  
 始て年号大化と  
 立つハ有百官々

位等と制定も  
 降明 皇極帝重祚  
 天智 舒明帝御子  
 位階十六と定む  
 弘文 天智帝御子  
 大海人と闘ふて  
 利せに帝自ら縊  
 て崩す  
 天武 天智帝弟  
 爵位股色を定む  
 持統 天智帝御女  
 律度量を定め又  
 陸奥十二郡を割  
 て出羽を置く  
 文武 天武帝孫  
 元明 天智帝御女  
 元正 文武帝嫡  
 聖武 文武帝御子

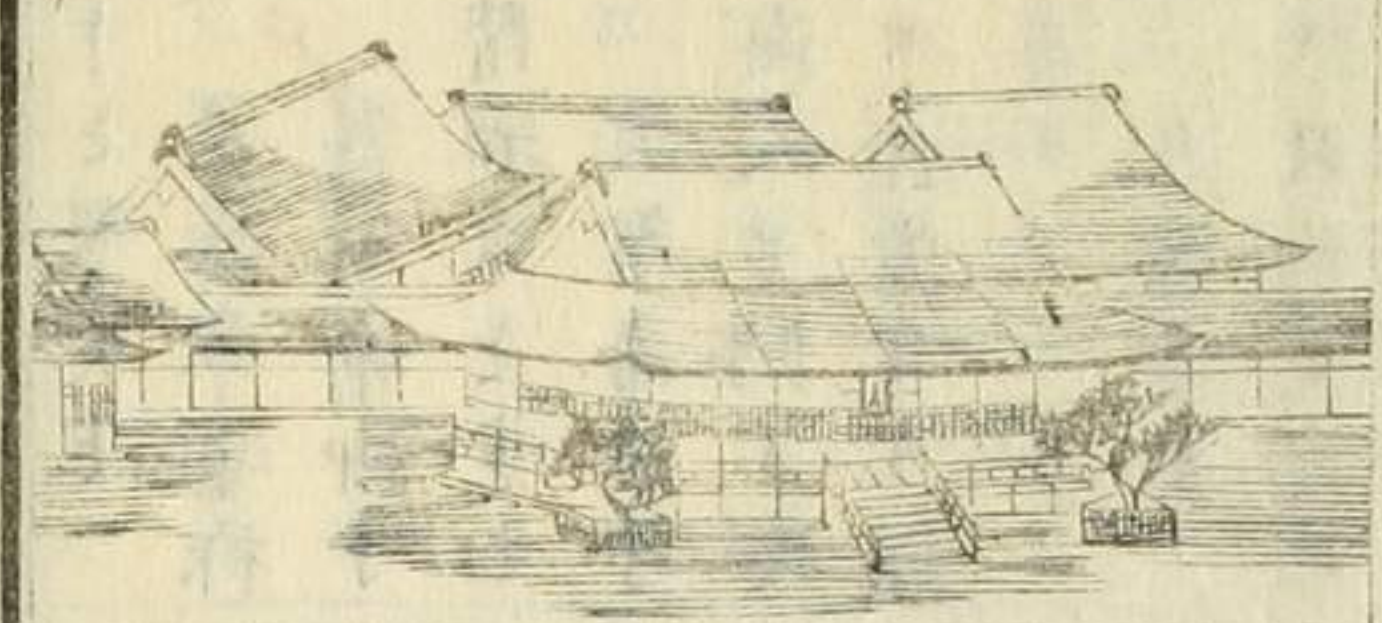
澁衢 一百世 邑部落 二百五  
 拾三 位の家數 八式 万貳千九  
 百三十八 戸 人 負凡 拾三 萬  
 一 千九 百 拾 口 也 熟 地 石 五  
 畝 八 斗 六 升 南 高 北 低

吾妻 飯 飯 豊 豊 岳 岳 南 西  
 并 立 立 立 立 立 立 立 立  
 其 山 脈 連 亘 荷 物 運 輸  
 便 於 中 少 々 平 坦 也  
 深 山 形 勢 乃 道 筋 冬 人 の 往 來



孝護 聖武帝御女  
 諱仁 天武帝孫  
 孝護帝天皇と於  
 路に遷し重祿を  
 赫徳 孝護帝重祿  
 僧道 鏡を寵を  
 光仁 天智帝孫  
 桓武 光仁帝御子

西京紫雲殿の園



茂如の起るり河脈を統る大  
 ねの寺唯松川に水源を吾妻  
 の山より湧出く末を岩上乃  
 河を共小酒田に海へ入り  
 旭嶽の岩窟間より流る水も

都を山城に遷し  
 神武帝以来の謚  
 号を定む  
 平城 桓武帝御子  
 嵯峨 平城帝同母  
 弟 弟  
 淳和 嵯峨帝同母  
 弟 弟  
 仁明 嵯峨帝御子  
 文徳 仁明帝御子  
 清和 文徳帝御子  
 陽成 清和帝御子  
 藤原基經攝政  
 光孝 仁明帝御子  
 宇多 光孝帝御子  
 醍醐 宇多帝御子  
 時平道真を諫し  
 て大宰府に配す

荒川のあま淵流飯行遠り  
 するを越後若海に流出此  
 他各所の溪澗に知れ四方に  
 灌溉す地味を山野を除く外  
 皆膏油を瘠土無く米穀



朱雀 醍醐帝御子  
 將門純友叛逆を  
 村上 朱雀帝同母  
 弟  
 冷泉 村上帝御子  
 天子の院号當帝  
 を始めとす  
 四融 冷泉帝同母  
 弟  
 花山 冷泉帝御子  
 一條 四融帝御子  
 三條 冷泉帝御子  
 後一條 三條帝御子  
 後朱雀 後一條帝御子  
 後冷泉 後朱雀帝御子  
 安倍頼時乱をか  
 と源頼義之を討  
 ち

菜蔬さいそ不足ふそく糸いと中ちゆう秀しゆう

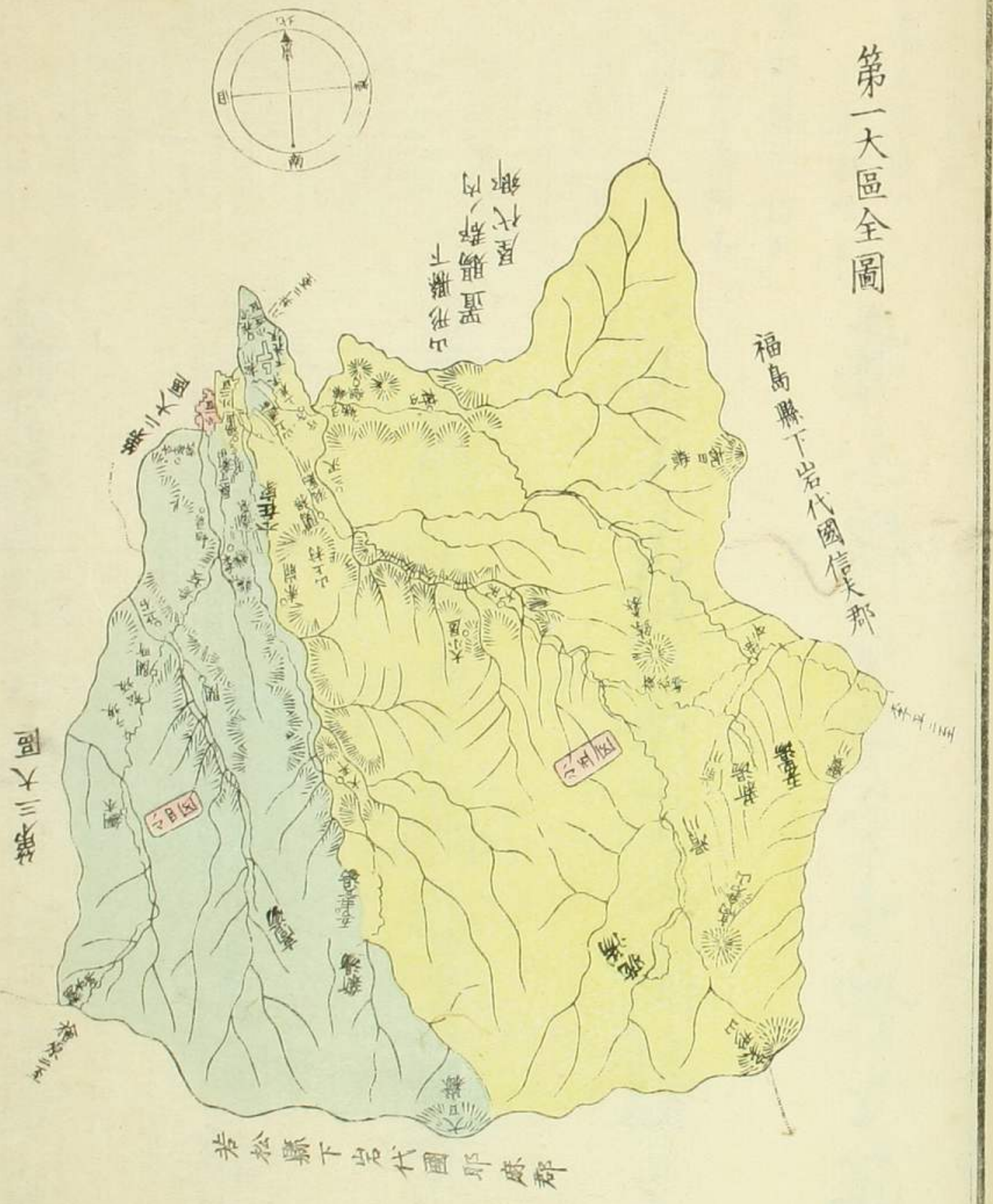
善ぜん禪ぜん本邦ほんぱう一いつ乃なり名な譽え乃なり

利り備び園えん縣けん六ろく大だい區く武ぶ拾じゅう八はち

小せう原げん乃なり分ぶん古こ其その境けい界がい乃なり概がい

畧りやくは

第一大區全圖



第三大區

早口

七



後三條 後朱雀帝御子  
 白河 後三條帝御子  
 堀河 白河帝御子  
 白河帝政を院中  
 に聞く出羽の武  
 衡家衡乱をあるも  
 源茂家之を討て  
 鳥羽 堀河帝御子  
 崇徳 鳥羽帝御子  
 近衛 鳥羽帝御子  
 後白河 崇徳帝同母  
 弟崇徳帝を讃岐  
 に遷花  
 二條 後白河帝御子  
 重盛信頼を討す  
 六條 二條帝御子  
 清盛太政大臣と  
 ある

高倉 後白河帝御子  
 平氏益專横  
 安德 高倉帝御子  
 頼朝兵を挙く  
 後鳥羽 高倉帝御子  
 平氏西海に亡ひ  
 頼朝霸府を開く  
 土御門 後鳥羽帝御子  
 北條氏権を執る  
 順徳 後鳥羽帝御子  
 公暁実朝を殺す  
 源氏正統絶つ頼  
 経を將軍に任す  
 仲恭 順徳帝御子  
 茂時暴虐帝を廢  
 し三上皇を遷す  
 後堀河 高倉帝孫  
 四條 後堀河帝御子

舊米澤の城北址上杉神社

畔りもりの南乃方と若松縣未

福島小と又山石翁と隣り

村落十七街数を四十

有三併せると土地を弟壹大

區は平地は稀なり山多く

険しき驛路と板谷綱木

の五峠と餘山遠乃ゆると彼方

は方不存と一帯候冬其威

猛烈とて毎冬積雪六七尺



後醍醐 土御門帝孫

頼経の子頼嗣を  
將軍に任す

後深草 後醍醐帝御子

宗尊親王を將軍  
に任す

龜山 後深草帝同母

弟惟康王を將軍  
に任す時宗元使  
を逐ふ

後宇多 龜山帝御子

元兵來寇颯風其  
船を覆す

伏見 後深草帝御子

久明親王を將軍  
に任す

後伏見 伏見帝御子

後二條 後宇多帝御子

雪解を族々耕とて七性種

落かたぬ小教物野菜之

まらぬり先其坊邑名稱為米

浮城島南なる坪端所也花園

町門東界小姓所也南の谷

堀小沼馬場の町より膳仲町元

了口菩提所と東海と中と分ちて

三河と家林泉寺早黒川町

七軒所也南生寺馬口寺海子小

紺屋所之を聯ねて小菅区朝

守邦王を將軍に  
任す

花園 伏見帝御子

後醍醐 後宇多帝御子

帝王室の衰を患

ひ正成に興復の

事を委ね遂に南

北両帝後宇多帝尊

氏を攻て利あり

て正成戦死す尊

氏北朝光明帝を

立つ

後村上 後醍醐帝御子

義貞正行小戦死

北朝崇光帝立ち

又後光厳帝立つ

後龜山 後村上帝御子

義満を將軍に任



十北朝後円融帝  
立つ  
後小松 後円融帝御子  
南北合一神皇京  
に還る美持を將  
軍に任じ是より  
足利氏將軍職を  
世襲す  
称光 後小松帝御子  
後花園 宗光帝御子  
赤松満祐將軍を  
殺す山名持  
豊伐て之を誅す  
後御門 後花園帝御子  
山名細川京師を  
騷擾す  
後柏原 後御門帝御子  
後奈良 後柏原帝御子

楊子大早也柳也免許  
所東寺所今圃を跡も度り東  
早神明長所福田も所村も  
小貳の遠東へ進み松川乃流  
隔々上嘉津小國早也信濃

長尾景虎上杉の  
姓を冒し又信玄  
と川中島に闘ふ  
正親町 後奈良帝御子  
足利氏七ひ織田  
氏起り又秀吉関  
白となる  
後陽成 正親町帝孫  
秀吉大挙朝鮮を  
伐つ後家康を將  
軍に任す諸侯江  
戸城に朝す是よ  
り徳川氏將軍職  
を世襲す  
後水尾 後陽成帝御子  
豊臣氏亡ふ  
明正 後水尾帝御女  
後光明 後水尾帝御子

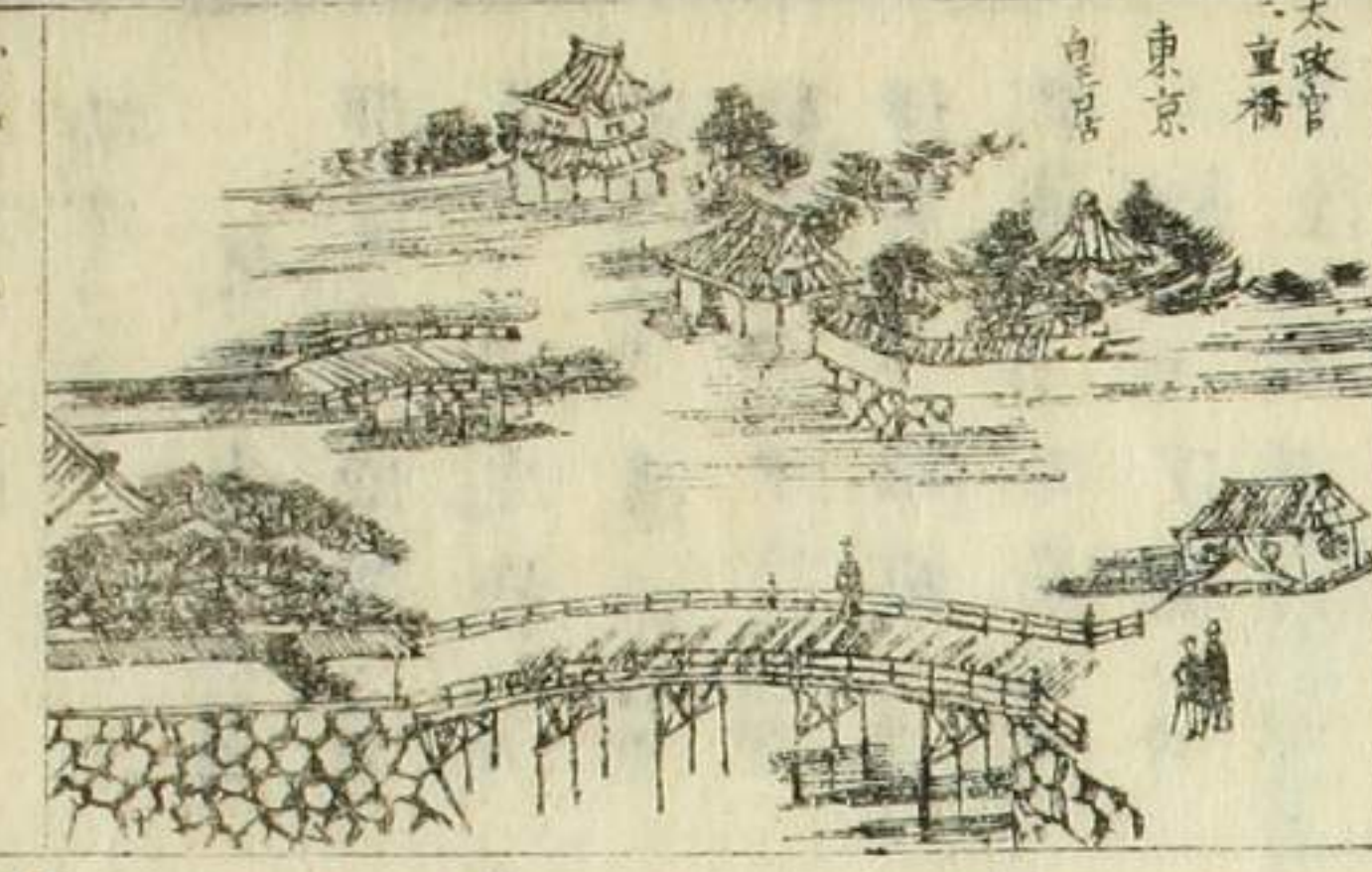
早中まき長所打越之傳  
孫清も不程近ま下在津乃  
上那所もさ窟もあや鐵砲  
早弓はさしあは華津お  
南も山上通り所稟早合せ小



由比正雪謀叛す  
 後西院 後光明帝異母弟  
 靈元 後西院帝異母弟  
 東山 靈元帝御子  
 中河門 東山帝御子  
 櫻町 中河門帝御子  
 桃園 櫻町帝御子  
 後櫻町 櫻町帝御子  
 後桃園 桃園帝御子  
 光格 東山帝曾孫  
 魯国 飯東に冠す  
 仁孝 光格帝御子  
 孝明 仁孝帝御子  
 米英魯蘭佛の五國と條約を結ぶ  
 孝明帝御子

三匠 柳田小區 宿倉と長手  
 新田 六十 赤原 糸原 笹野  
 可猪 苗代 新早 横堀 石垣町  
 古志田 毎世の邸 過々 李山 山  
 小立石 むつた 関界や

徳川慶喜大政を奉還し王政古に復す 出羽を羽前羽後之二国に分つ 又皇居を東京に遷し給ふ



畿内八道  
 畿内五ヶ国

田々 おをた 見行と 峠 末  
 尾木 郡 山坂 越え 岩代 の 耶  
 麻乃 郡 小隣 里 堀 利 東 倚  
 小五の 區 東山 堂 森 梓 山 山  
 上お 法 中 子 ある 長子 子 根 小











陸奥 四郡 羽前 三郡  
 羽後 九郡  
 北陸道 七ヶ国  
 若狭 三郡 越前 十二郡  
 加賀 四郡 能登 四郡  
 越中 四郡 越後 七郡  
 佐渡 三郡

山陰道 八ヶ国  
 丹波 六郡 丹後 五郡  
 但馬 八郡 因幡 八郡  
 伯耆 六郡 出雲 十郡  
 石見 六郡 隱岐 四郡  
 山陽道 八ヶ国  
 播磨 十六郡 美作 十郡  
 備前 九郡 備中 十郡  
 備後 十郡 安藝 八郡  
 周防 六郡 長門 八郡

南海道 六ヶ国  
 紀伊 七郡 淡路 二郡  
 阿波 十郡 讃岐 十二郡  
 伊豫 十四郡 土佐 七郡  
 西海道 九ヶ国  
 筑前 十五郡 筑後 十郡  
 豊前 八郡 豊後 八郡  
 肥前 十一郡 肥後 十六郡  
 日向 五郡 大隅 八郡  
 薩摩 十三郡  
 二島  
 志岐 二郡 對馬 二郡  
 北海道 十一ヶ国  
 渡島 七郡 後志 十七郡  
 石狩 九郡 天塩 四郡  
 北見 十郡 釧路 八郡  
 日高 七郡 十勝 七郡  
 訓路 七郡 根室 五郡

第壹 第三大區 留中 籠り

繁花 地東 松河西

鬼面川 塚を畫り 八

拾八町 六郎 為連 友合を志

第貳 大區 域狭き 土地賑ひ

山野 罕 治 小 中 地 賑 換を

陳 可 其 名稱 賑 尋

賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑

賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑

賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑 賑

里之...



千島 五郡

琉球

沖繩島 中頭省

國尻省 島字 四十余

置賜縣管内名勝旧蹟

米沢城 一名霍舞城

四條帝御宇歷仁元年源頼朝の臣長井

九工門尉大江時廣

築之後小松帝至徳

年中同氏七世の孫

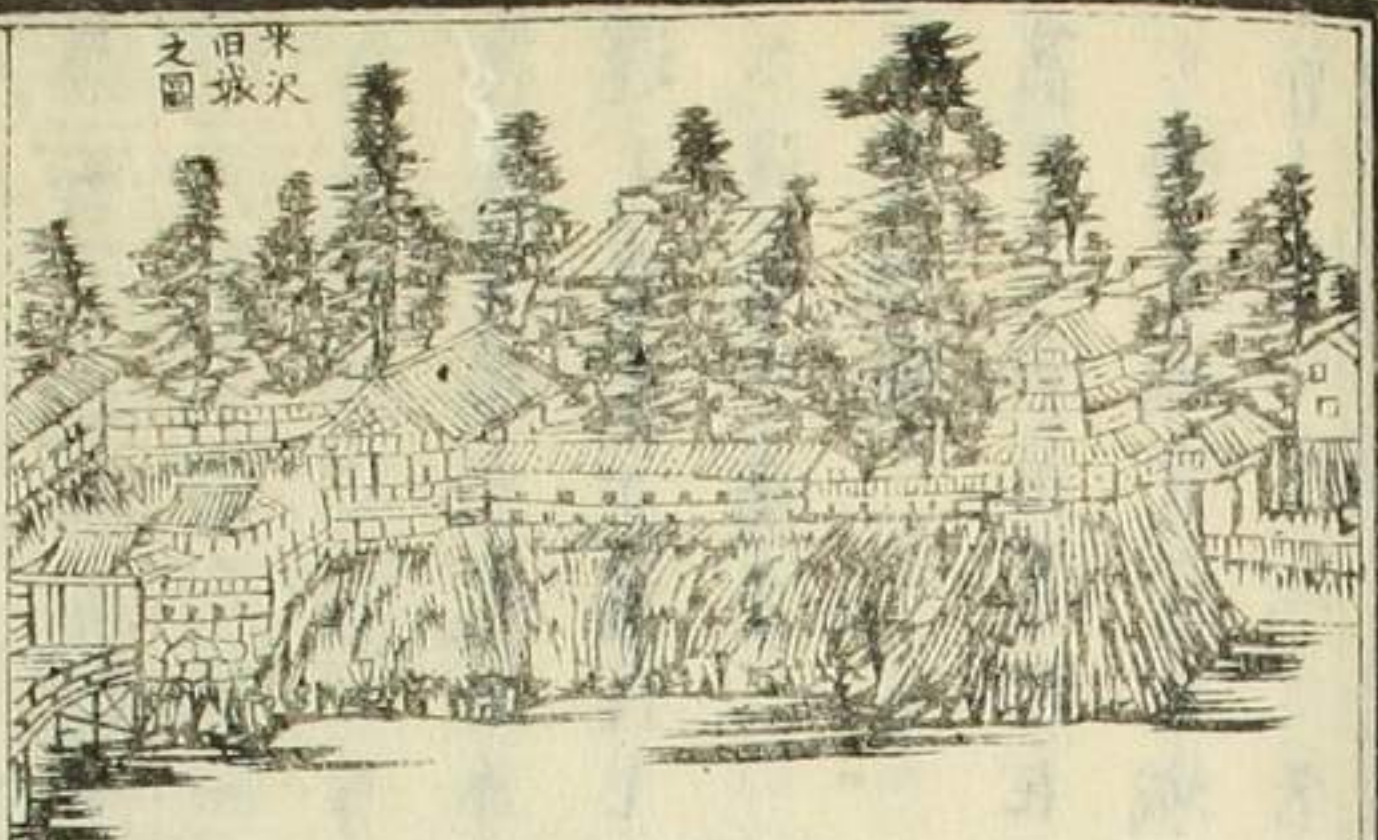
出羽守廣房伊達正

宗の爲めよさる

尔後伊達氏の門族

遠藤基信之を守る

天正十八年豊臣太



閣正宗八世の齋中  
納言政宗を奥州大  
崎下遷し置賜郡を  
蒲生氏郷より久  
録年中同氏の門族  
蒲生四郎兵衛郷之  
是を守り後野州守  
都宮より封を移され上

早之矢方

工より之龍所裁後番匠表

可より清水所裁ぬの方明神堂

可より仲所割出所也管沼早

元沖間より方小座頭早北も

可より桐町志辻西隈り小寺匠

亦小武匠より継更一人家稠

密夜も昏夜注来絶を収立

町城上一登りて地番匠所

川井小路也桶屋所割出銀冶

生より蔵之内新早匠り鐵砲

里之口

十四



杉氏替て之を領し  
 慶長三年長臣直江  
 山城守をして之に  
 居らしむ同六年景  
 勝封を削られ會津  
 より移て興地より  
 城の外郭を經治  
 し松ヶ寄を改め霍  
 舞城と云ふ相傳る  
 十三世二百六十九  
 年より明治二年  
 茂憲土地人民を奉  
 還し東京に移住し  
 尔後之を廢す  
 霞城址  
 箭子山の出寄に在  
 り隣背烟霞常に城  
 郭を蔽ふを以て名

くと云ふ伊達大膳  
 太丈正宗大江廣房  
 を滅し長井郷を押  
 領して屋代郷高島  
 に城を築き氏宗持  
 宗成宗の四世之に  
 住を長録年中會津  
 の城主芦名氏屢々  
 成宗を襲ふ成宗恐  
 れて高島城を棄て  
 霞城を修し更に樓  
 臺外郭を設け箭子  
 山の巔に千疊敷の  
 關を造営し寛正年  
 中之に移る其後尚  
 宗植宗暗宗輝宗よ  
 至る輝宗天正十三  
 年十月八日二本松

屋界やまぢ小宮さくみや田たと粗界あらまぢの辻つじ末すえより

銅屋どうや子方こがた老所らうじよ土橋とひし小所こじよや業ぎよ

袋所ふくろ木挽界きひき四ヶ一造りしよいちぢ江東

外と内うち於お桶とふふ引ひ夫そ是こ

小こ二に深ふかくく城蹟しろあとの跡あと子こ當ありり

後部界ごぶ界まぬぬききのの内うち片かた立た拾しよ

騎海かゐちち本ほん五十ごじよ橋はし所じよ袋界ふくろ子こ方がた

此こ南みな田所たじよと板いた子こ方がた無む界ま所じよ

梶かぢ子こ方がた直ち界ま所じよ桂かつら早はや子こ方がた館たに

山口やまぐち泷たき小者こもの所じよのの小こ之の方がた代た界ま所じよ

里之口







盛戦死し吉俊逃れ  
て中山城に入らん  
と云山形勢後を退  
ふて来る若林織ア  
佐あるもの掛入石  
の陰より突出し敵  
兵を防ぐを以て吉  
俊捕やく城は入る  
を得より而して山  
形勢は迫つて城を  
圍ししか城兵強く  
禦き夜に入て之を  
退去せしむ其後吉  
俊北の平山へ陥穿  
を穿ち穿上り麦を  
植へて敵を欺き陥  
れ警を報せりと今  
尚其穴現存を

鮎貝城址  
鮎貝村あり往昔  
伊達氏の臣鮎貝藤  
太郎盛宗之住を  
曾て盛宗佐々重  
會津義廣岩城常隆  
相馬義胤白川義親  
石川照光等と謀り  
宗家の伊達正宗を  
討んとせしか事お  
り遂に山形に出  
奔す後蒲生氏の臣  
高井権右五門及村  
田弥助之居り上  
杉氏に至り家臣中  
條次三盛并いよ  
本庄出雲忠長等交  
番之を守りしあり

里之矢之

矢<sup>ヤ</sup>本<sup>ト</sup>能<sup>イ</sup>ま<sup>ウ</sup>る<sup>ル</sup>上<sup>ウ</sup>中<sup>チ</sup>下<sup>カ</sup>南<sup>ミ</sup>小<sup>コ</sup>

新<sup>シ</sup>町<sup>ン</sup>三<sup>チ</sup>軒<sup>ン</sup>早<sup>ク</sup>山<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>吹<sup>ク</sup>

野<sup>ノ</sup>友<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>ま<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>鶴<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>お<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>山<sup>ノ</sup>お<sup>キ</sup>

や<sup>カ</sup>み<sup>チ</sup>地<sup>ノ</sup>む<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>諺<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>鐘<sup>ノ</sup>

山<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>軒<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>長<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>仙<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>

よ<sup>ク</sup>ま<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>市<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>横<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>上<sup>ノ</sup>横<sup>ノ</sup>

町<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>大<sup>ノ</sup>橋<sup>ノ</sup>浦<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>あり

冬<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>該<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>内<sup>ノ</sup>は

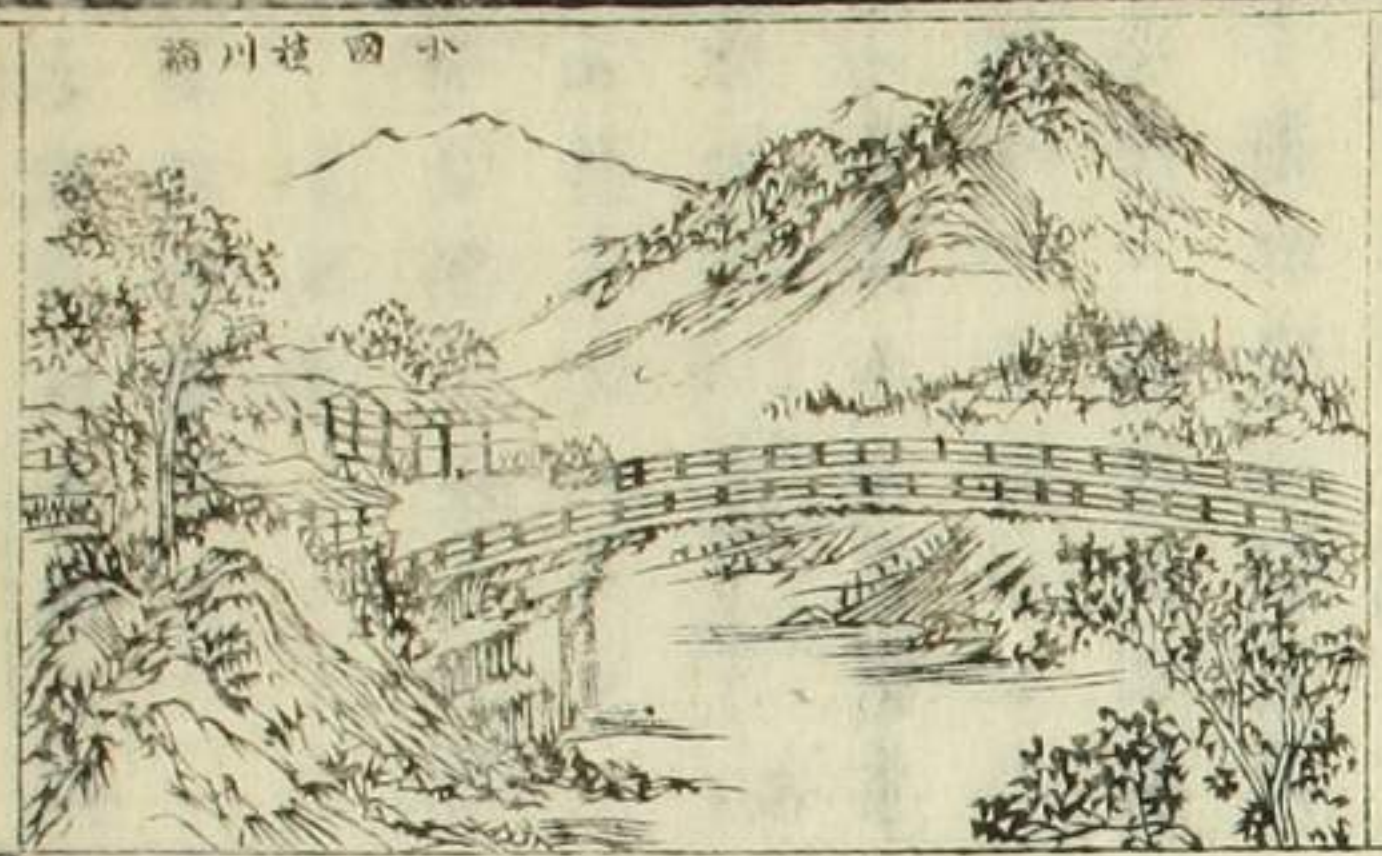
赤<sup>ノ</sup>芝<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>子<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>果<sup>ノ</sup>

汁<sup>ノ</sup>狸<sup>ノ</sup>

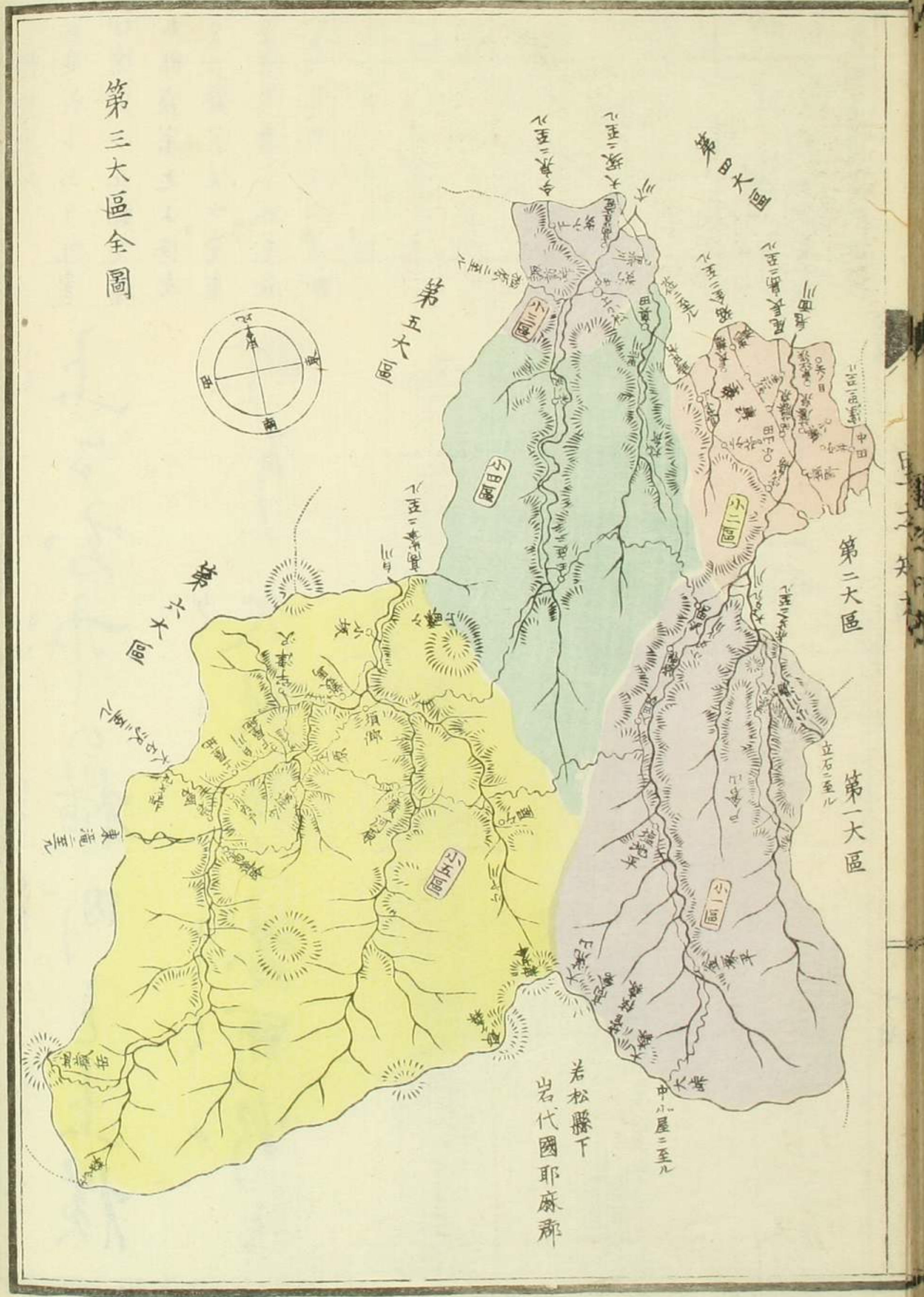
里之印

十七





小國城址  
 小國町村に在り昔  
 日泉清綱の子小國  
 太郎俊衡之に居り  
 後伊達家臣上郡山  
 盛為蒲生家臣佐久  
 間之在工門尉上杉  
 家臣松本伊賀助也



第三大区の境目は南無  
 岩代耶麻郡西小東の三方  
 其他五大區と接する辰巳  
 此方より戌亥にかけて西南  
 一面より山渡りをお墨敷

里之口

十八



未茲に任を後交代  
を以て番守を  
新田墟

田沢村に在り河館  
五郎基衡の弟泉十  
郎清綱通水俊衡の父  
太田師衡の祖  
三男新田冠者藤原  
經衡か居館かり子  
孫代々長井氏に属  
す新田遠江守同美  
濃守白川の戦に伊  
達正宗の爲め殺  
さる伊達氏其孫新  
田安房守を立て家  
を嗣らしむ館山村  
館山寺を房州の開  
基なり其碑今も存  
す

輿壇  
奥村に在り伊達中  
納言政宗の異母弟  
遠藤宗壽の邸墟を  
り宗壽嘗て輝宗の  
嗣子政宗を殺し後  
に九歳に統かしめ  
んと謀り事露れて  
小肤村に逐るる宗  
壽後野中氏と妾  
とし勝千代を生む  
勝千代出家し大雲  
と号し五味沢村の  
長福寺を開く  
二色根墟  
二色根村にあり山  
陰中納言十二世の  
孫栗野次郎藤原茂

薪を炭ふするむあれが五穀に

之と不き言深地唯水方の数々

仰は饒田沃野の平らな地

貧乏交々雜りする四十有五

邑々を五乃山区に分畫し其

大略紙数ふれば小形川おハ

大橋の川の東に温泉場あり

離れし梁沢邸少々下り

小橋川を西之中瀬り口田

澤神原入田海木乃根巖角



廣か居城あり其孫  
十郎元工門尉其子  
木工頭秀用に至て  
伊達氏の臣族と  
る後罪を政宗に得  
て羽柴秀吉に仕  
功を以て采邑万石  
を賜ふ終に伊豫の榎本  
城を領し十五万  
石と政宗之を聞て  
憤り不堪へは秀用  
を歸さる可き旨を  
秀吉に陳を秀吉其  
勇を愛して返さん  
後秀用石田三成よ  
誣せられ洛の東山  
に自尽し家系絶す  
昔日金山二色根の  
辺を粟野の里とも

唱へしハ茲に因る  
と云ふ  
八木橋及佐氏泉  
八木橋ハ花沢村に  
在り昔し御館五郎  
基衡の子佐藤彦司  
正信此に占居す或  
佐藤師治の  
子と云ふ正信五子  
あり二子早世す三  
男継信源義經の孫と  
八長に戦死す  
四男忠信又義經の孫  
なり堀河に  
死す五男と朝信と  
云ふ正信八木橋の  
莊を弟あり朗信と  
与へて兄の元治を  
るかの信夫郡舞江  
に住るを以て之に  
終れり佐氏泉と八

踏むむけと金塚事也大嶺

吟りし先々岩代也是小

寺原乃山家也言油老鏡の

土地多き小の原なる物と塩野宮

井小濃中田矢野目成島小山

回村上下小菅子赤島の藤泉お江

朕お一深と東沢小相原

長橋むら各田畑の耕地身

還小三區は黒川也高荳北菟

言はれぬと方諏訪の嶺乃林藤

里之矢方

廿



木橋より未の方十  
五六町に在り数株  
の蒼松冷泉を繞り  
風致最も好く避暑  
の頃ハ士民群を  
す則ち正信の庭地  
と云ふ又此泉の西  
に月見山あり佐藤  
氏望月亭の跡あり  
と然れとト八木橋  
と該泉の距里殆ト  
半里之を庭池と云  
ふハ疑ふ處し或ハ  
其別園ありと云  
ふ未之孰レか是か  
ると知らん

私る上中下此小松好る隈ハ  
小四の邊奥田大舟朴津に伊勢  
嶺を攀ち空り玉庭はる菱  
沼畔を城は小五の邊  
何事も深山幽谷乃中住か



氏の時大次士佐守  
之に住す祿三千石  
後直江兼統に属せ  
ん事を願ふを許さ  
れず遂に其地の神  
主とある其後齋今  
子存せり云々  
牛森原古戰場

寸小松お物目名の付く  
河は此流きみの下須郷出ら  
尚も下り小坂部片他  
家も白川の河に左右に散在  
十数宇津澤下地

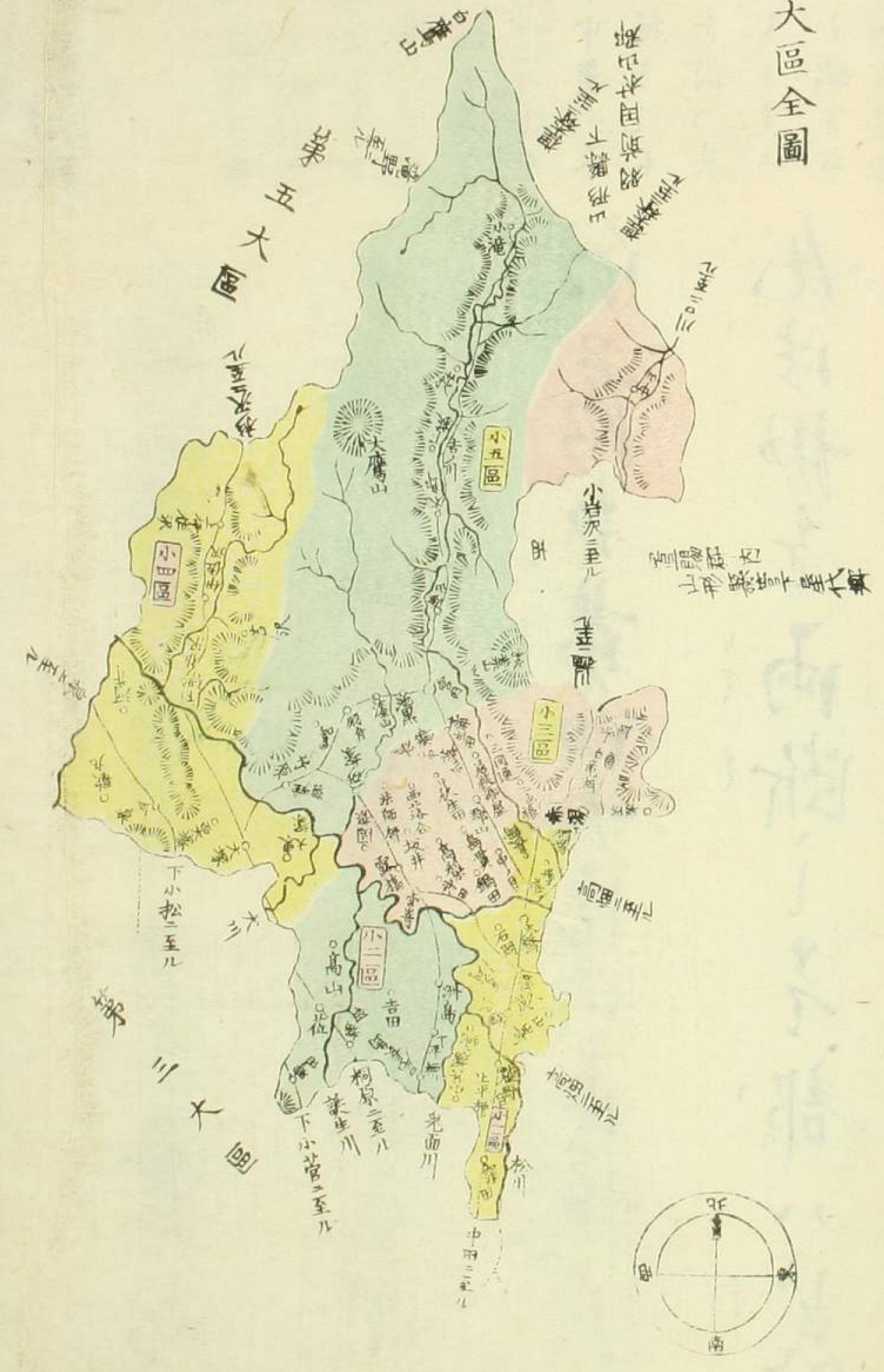
聖徳太子

廿一



梓山村に在り原頭  
古墳二三を存す之  
を穿ては皆白骨也  
延宝六年花沢の住  
人石坂源七あるも  
の牛森の畑畔に大  
石あるを見入を雇  
ふて之を穿つ其下  
に石櫃あり裡に大  
なる髑髏一砂鉢様  
のもの二太刀二十  
腰し首と矢鏃數百  
を貯ふ最古の物と  
して近時の品にあ  
りて按て日本記桓  
武嵯我の頃東奥屢  
に敗す古佐美坂の  
上等撃て之を誅す

第四大区全圖



里之矢

白川上屋地岩倉と川の右手

土地を占て左手に高濑路

川内戸進谷上原廣河原是

等土地出物於中津川

と勢強き有利

里之矢

廿二



と或ハ此時の旧骨  
に似たり一説に安  
倍頼時の髑髏と云  
ひ又源義家の古戦  
場と云ふ

御館山

中津川小坂村に在  
り往昔太郎松人と  
云ふ賊魁此山上に  
据も源義家之を誅  
鋤す後御館五郎基  
衡奥州鎮守府將軍住す  
秀衡の父あり  
又文治年中奥州奉  
衡王命に從て右  
府頼朝之を討つ其  
餘賊良元あるもの  
逃れて茲に據る右  
府又長井丸工門尉

東山少々山石の支配しの土地

小联接れん一車を東三西を又

才五大匠と果さうして六十八名

卯辰辰辰第四大匠の辰域しん

凡此地を兩断りやんしを部ハ荒

蕪山野乃地を部ハ肥沃の

收穫地は他河を部ハ縦横

小區内は流々吉野川また

鬼面川誕生川大河等も今

法津中落是倭国あま松川乃

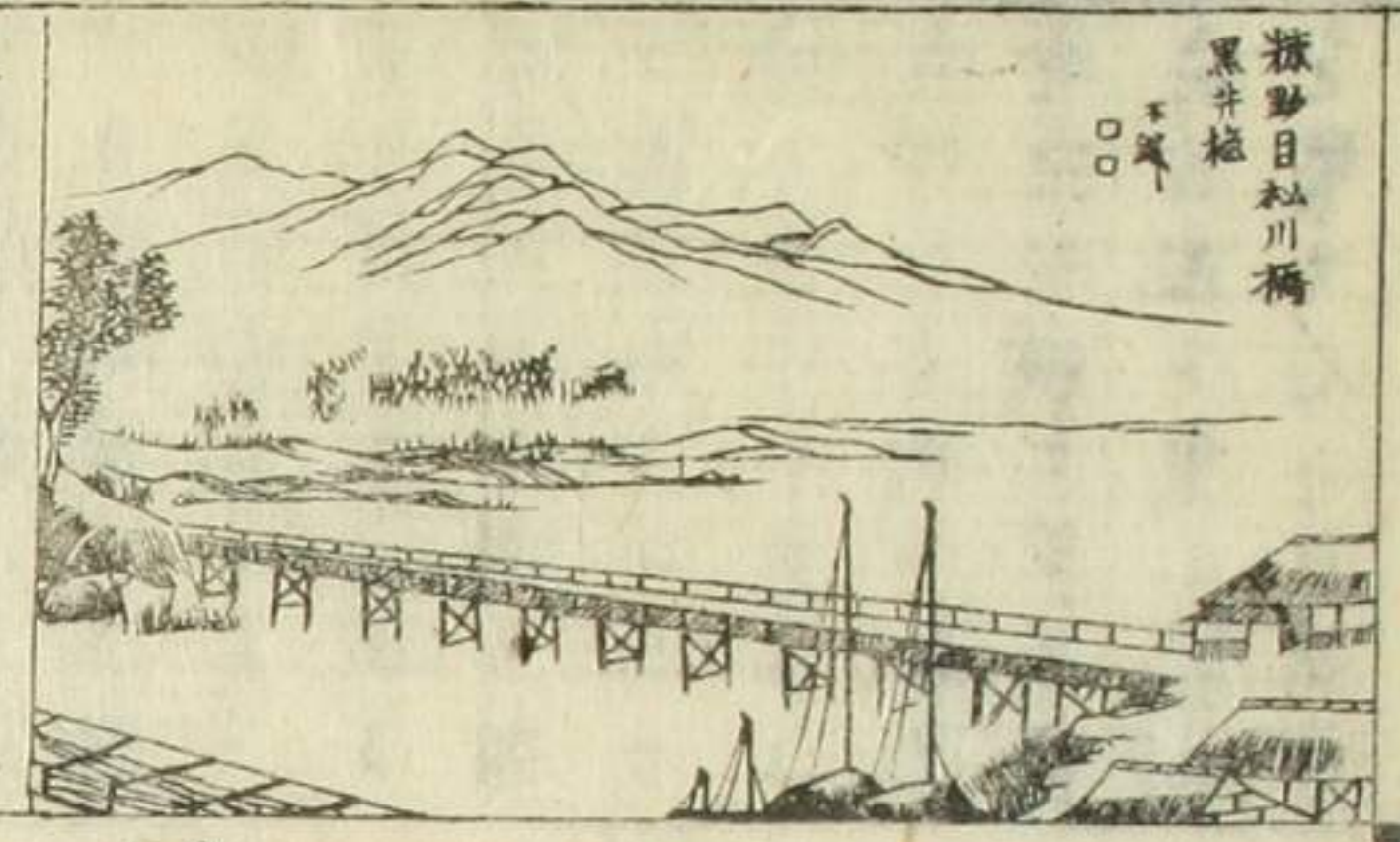
大江時廣に命して  
之を撃つしむ時廣  
勝を養ふるに及ん  
て長井の郷を賜ひ  
其功を賞すとあり  
糠の目川  
松川の水糠の目川  
を過るを糠の目川  
と云ふ明應三年伊  
達尚宗霞城に在り  
其子植宗高島城に  
居る父子の間隙  
を生し四月十二日  
糠の目川の東西に  
對陣して戦を挑む  
會津の城主芦名盛  
高其處に乗し霞城  
を襲ふるとは尚宗

里之口

廿三



旗野目川橋  
黒井松  
五年



之を聞て大に恐れ  
遂に兵を揚げて去  
植宗敢て追をん  
赤兵を高畑に還へ  
上杉神社  
米沢旧城内に在り  
慶長十七年上杉謙

信の遺骸を世に取  
む明治五年謙信十  
四世の孫治憲鷹山  
を合祭す謙信八本  
長尾氏ありしか上  
杉憲政の譲りを受  
け其姓を冒す其武  
勇八世人の能知る  
處なり其子景勝封  
を會津に移され又  
米沢に轉す時々遺  
骸を遷座し代々之  
を崇奉す又鷹山ハ  
日向高鍋の城主秋  
月種美の四男重定  
を養ふれ上杉の封  
を継ぐ大に節儉と  
守り士民に産業を

一川濁流平合流す是水の

水利を頼みて耕す場處

此名稱を先少を臣の産田村

糠乃月好也上杉柳龍口名

南少を塚福沢山寄夏刈

或は津久茂石岡大橋に俎

柳長尾を柳塚を限りに

小一の居る尾長嶋下平柳

沙崎お吉田高山麓邨城

金時田村八ヶ村少二原より



御めて仁惠を施す  
実子同氏中奥の賢  
君あり

成島八幡宮

源茂家奥羽征討の  
時京師の石清水八  
幡を移して茲に幣  
帛を捧くと云ふ長  
引出羽守大江宗秀  
建立し明德元年伊  
達正宗再營す社内  
の後山眺望殊に互  
しく靦近青松の間  
に櫻花を植へ又一  
層の風景を添へ

熊野神社

宮内村に在り伊弉

冊尊速玉男命事鮮  
男命と合祀す傳曰  
平惟盛建立する處  
なりと惟盛嘗て一  
族源家より七され身  
独り逃れ紀州那智  
浦に至り偽て樹を  
削り平惟盛入水と  
記し僧とあつて熊  
野に隱る源氏の搜  
索甚嚴かり於茲惟  
盛熊野権現を真ひ  
去て当郡堂森村に  
潜居し六七年を經  
て宮内村に移り真  
来れる神像を此地  
に安置をこゝか

慈宮社

中之目お鍋田沖田宮崎

おり露橋関根お坂井

高梨嶋貫郡山法師柳長

瀨やあま市お落合お萩

生田お狭心屋お又福生田

若東おる山田三間通

お二色根赤湯お生澤お

松澤通りお鄰村お山形縣

下れお代郷又中山お丑寅

乃隅お龍お一孤郵戌亥

皇紀四

廿五



宮村の北に在り天  
鬼屋根大己貴稻倉  
魂等の命を鎮座す  
野川の流松川の水  
其東北を圍繞し社  
内清浄実に勝景の  
霊地あり

珍藏寺

深山村に在り旧ハ  
金蔵寺と号す曾て  
金蔵と云ふ里民あ  
り一日宮内村へ行  
く鶴を飼ふて賣り  
んとするものあり  
金蔵之を購て放つ  
鶴思ふ感して女子  
も化し來て金蔵の  
妻となり其赤貧を

資ん為め絹を織り  
て金蔵よむか之を  
宮内村に鬻き十五  
兩の金を得たり悦  
んで家に飯れも婦  
失て居るに始て霍  
の化身よるを覺る  
後彼絹織悉く霍の  
毛も化せしを以て  
益感し出家遁世し  
て霍の冥福を吊か  
今尚霍の毛織とて  
什物とせり故に霍  
布山と号す山上怪  
嵩奇木あつて風景  
頗る絶奇あり  
姥湯  
不忘山の北谷にあ

里之方

子任側小四に居る言低紀

濟の地を交え大塚村を去る

の枝村添く三つお分り河井

祇丸と名ふ山の守心の伴從澤木

上下澤佐津芦決也山阪多ま

小五區も砂塚梨郷井原も

木田村羽付深山池黒宮内

と山或る溪間も野もあま

太郎下萩萩小瀧も小方は

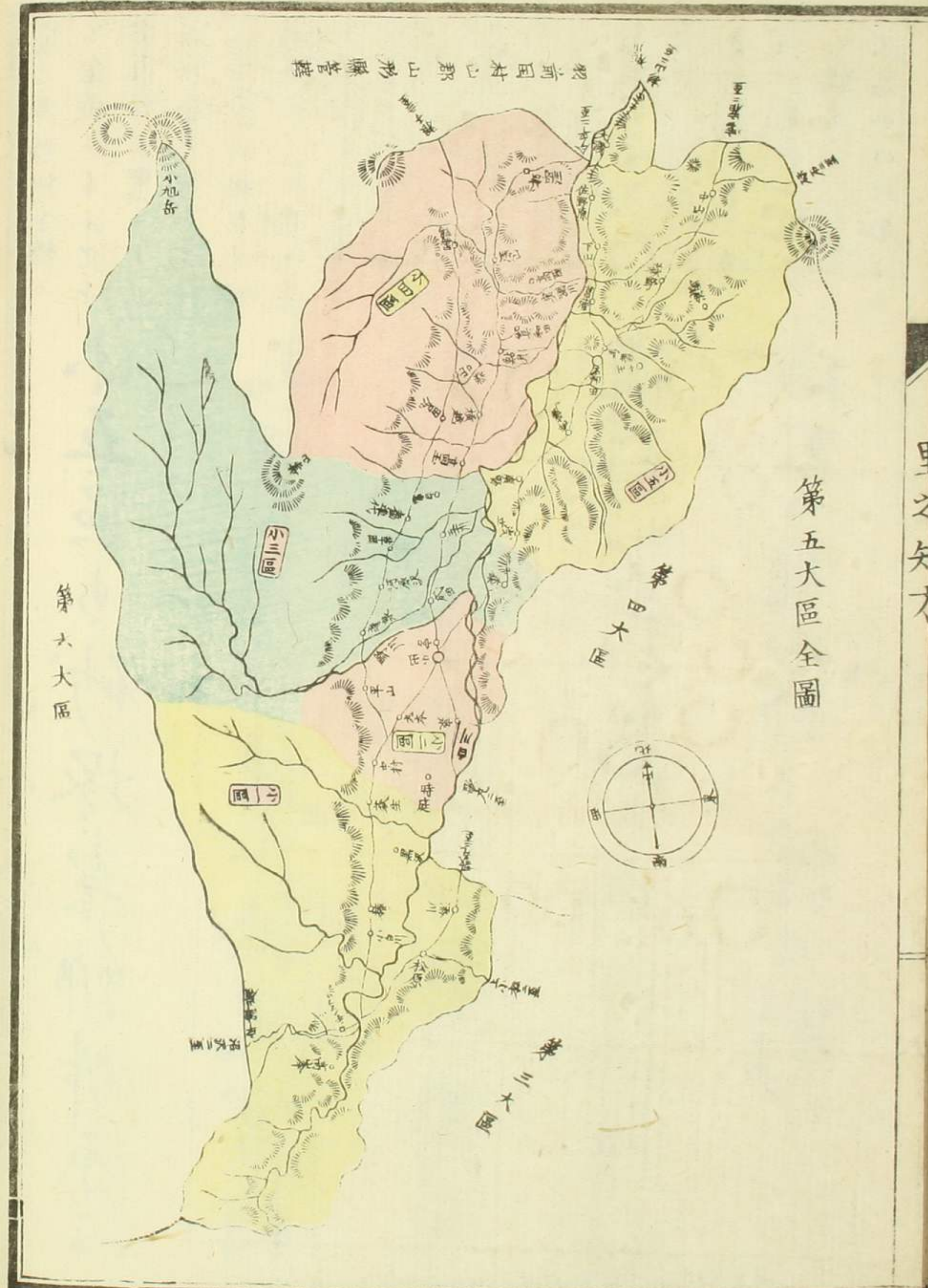
山石の村山形と埜せ利

聖文

廿六



第五大区全圖



第六大区



リ天文年中板谷の  
人大蔵あるかの山  
に入て途を矢小偶  
と老婆の一童子を  
して湯を穿らしむ  
るよ遇ふ大蔵之よ  
取路を向ふ老婆淡  
淵に浴して下れと指

第五大区乃地能なる南冬

隘<sup>せま</sup>業<sup>ひろ</sup>廣<sup>ひろ</sup>を四方よ山と周<sup>めぐ</sup>

ら一そおる四十あるの群<sup>むら</sup>

居る中或白川や松川は水

横<sup>よこ</sup>りは流<sup>なが</sup>る野<sup>の</sup>河<sup>がし</sup>と実<sup>み</sup>



示し又浴湯を患む  
 大蔵之が為め終日  
 の疲れを癒し身体  
 快爽を覺へ大に恩  
 と謝して家へ歸る  
 後、湯を開くと云  
 ふ山谷の幽趣殆ど  
 筆す可からず頗る  
 佳景あり  
 吾孀山又吾妻山  
 山上村より李山関  
 細木の諸村に亘り  
 若松縣下耶麻郡に  
 跨る日本武尊碓氷  
 嶺の古事を惹て一  
 名不忘山と云ふ其  
 高き所を東大嶺中  
 大嶺西大嶺と号す

中、瀑布あり又温  
 泉あり然れども積  
 雪早く消雪遅し  
 て白云常に峯を鎖  
 し周年金山を見る  
 甚稀れあり当群の  
 諸川多くハ峽山に  
 源す  
 飯豊山  
 岩倉村より西濱東  
 濱樽口小玉川の諸  
 村に盤り置賜磐船  
 耶麻等の郡に跨り  
 巖山神の祠あり  
 一歳の中雪を見さ  
 るもの僅かに數日  
 過ぎん白川玉川  
 の流峽山より出ん

淵を合せし勢漸く激流  
 寸都々談原も東南を  
 各原は時俵不較ふれ  
 稍温暖の土を帯る其  
 原因も祝瓶と朝日の嶮嶮

屹立し乾り構る空風を  
 流すは日光の反射を受  
 て陽和と得土壌肥沃な  
 木乃能く生ひ蕃るを中  
 葉も亦も滴出り列原

皇之矢方

廿八



又寛政十年上杉氏  
の臣黒井忠量ある  
人前山の石壁を穿  
ち千百余歩洞水を  
引て奥田大舟の諸  
村礎確の地を濶く  
人喚て飯豊の穴壇  
と云ふ  
朝日嶺又旭岳  
五味沢小朕寺泉の  
諸村に亘り置賜田  
川村山の三郡を跨  
る東方に面して夙  
く旭光を受るを以  
て名に風烈しく  
して草木長せし只  
葦草黄蓮を生ず嶺  
の残雪霜婆の白髪

厚子美良蚕井岡多ぬ隅冬

なありあ理生郊如の名目

を法がふ不挙と數は於冬

小寺法匠乃多峰おる女子

松原小公川椿添川黒澤

や社生此業より小二の屋時

庭中於九柱本むり平山

泉小出宮まより下りて小三

区東田五十川森おや西乃

山邊の寺泉河原津より利

子似より故子俗  
稱して高砂の翁婆  
雪と云ふ野川荒川  
の流れ茲に源す  
祝瓶山  
石滝金目の村に陟  
り其峯形尖るを以  
て尖り山とも名く  
獵業を為さるの多  
く此山に入る安政  
三年石滝の農丈榮  
松ふるの父と共  
に出て獵す此日降  
雪甚しく進退する  
能これ日暮食竭き  
父又病む榮松策笠  
を解き坐して父を  
擁護し終り生て還



る可からさるを知ら  
 り鎗銃を前子建て  
 屍所を表して遂に  
 父子凍死を家族具  
 飲らさるを怪し  
 人を雇ふて捜索す  
 後廿九日を経て榮  
 松子従へる獵狗屍  
 所に至り躊躇して  
 去らね始て其標を  
 見出し死骸を得  
 り上杉氏榮松の至  
 孝を憐み金若干を  
 施して之を旌表せ  
 り

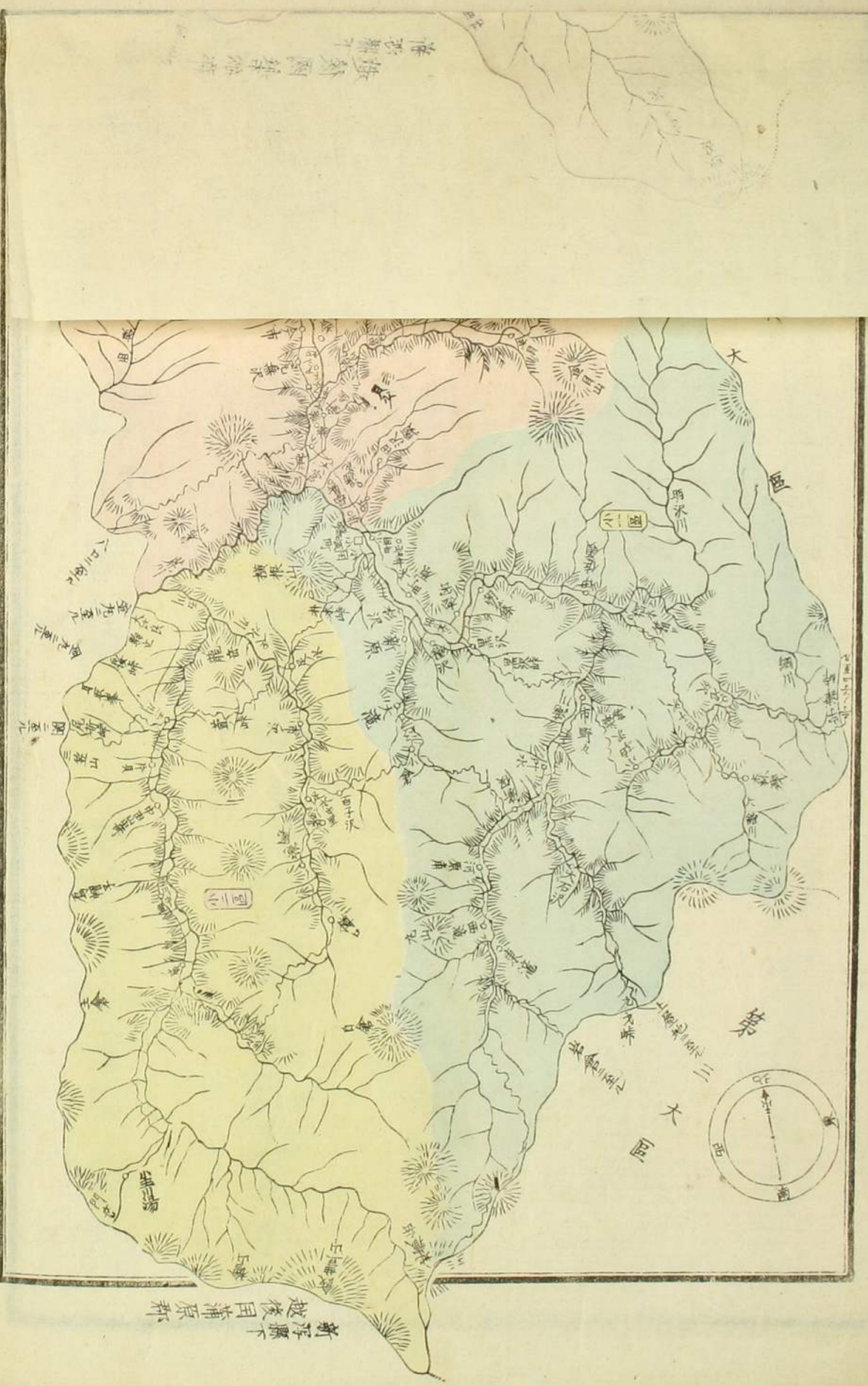
草岡母官勅進代白兔  
 小四注源子侍玉郎田尻  
 横越山口郡鮎貝箕和田  
 高尾也源山黒鴨朽窪  
 お心郡に柱近一赤い漲る

村山の両郡に跨る  
 昔年白鷹の巢くか  
 と以て名らに巔上  
 秋の行基の刻  
 なる虚空蔵の祠あ  
 り朝日祝瓶の峯と  
 對峙して昇足をか  
 す巔より東を眺  
 めは山形の景色す  
 眸に入て風光絶奇  
 あり

温泉  
 小の川 小の川村  
 貳拾六所泉質食  
 塩瘡疾等々宜し  
 高湯 関村三ヶ所  
 泉質胆礬上衝眼  
 疾々宜し

松川と涉り先々小女は原淺  
 立度中不畔反好石形田首蒲  
 の名修世系大漲を立度り馬  
 坊十王漲中木莊野の次乃中山  
 実子山中に任居あり





新庄縣下  
越後国蒲原郡

吾妻湯 太平村新  
 古貳ヶ所あり古  
 ハ泉質明礬切瘡  
 子宜く新ハ泉質  
 銀氣上衝眼疾ホ  
 子好し  
 五色湯 板谷村新  
 古ニヶ所泉質刺  
 篤重斯婦人月経  
 不順或ハ酸敗症  
 子好し  
 滑川湯 板谷村古  
 ケ所泉質明礬脚  
 氣切瘡ニ宜し  
 姥湯 板谷村一ヶ  
 所質明礬緑礬混  
 才腸胃衰弱病ニ  
 善し

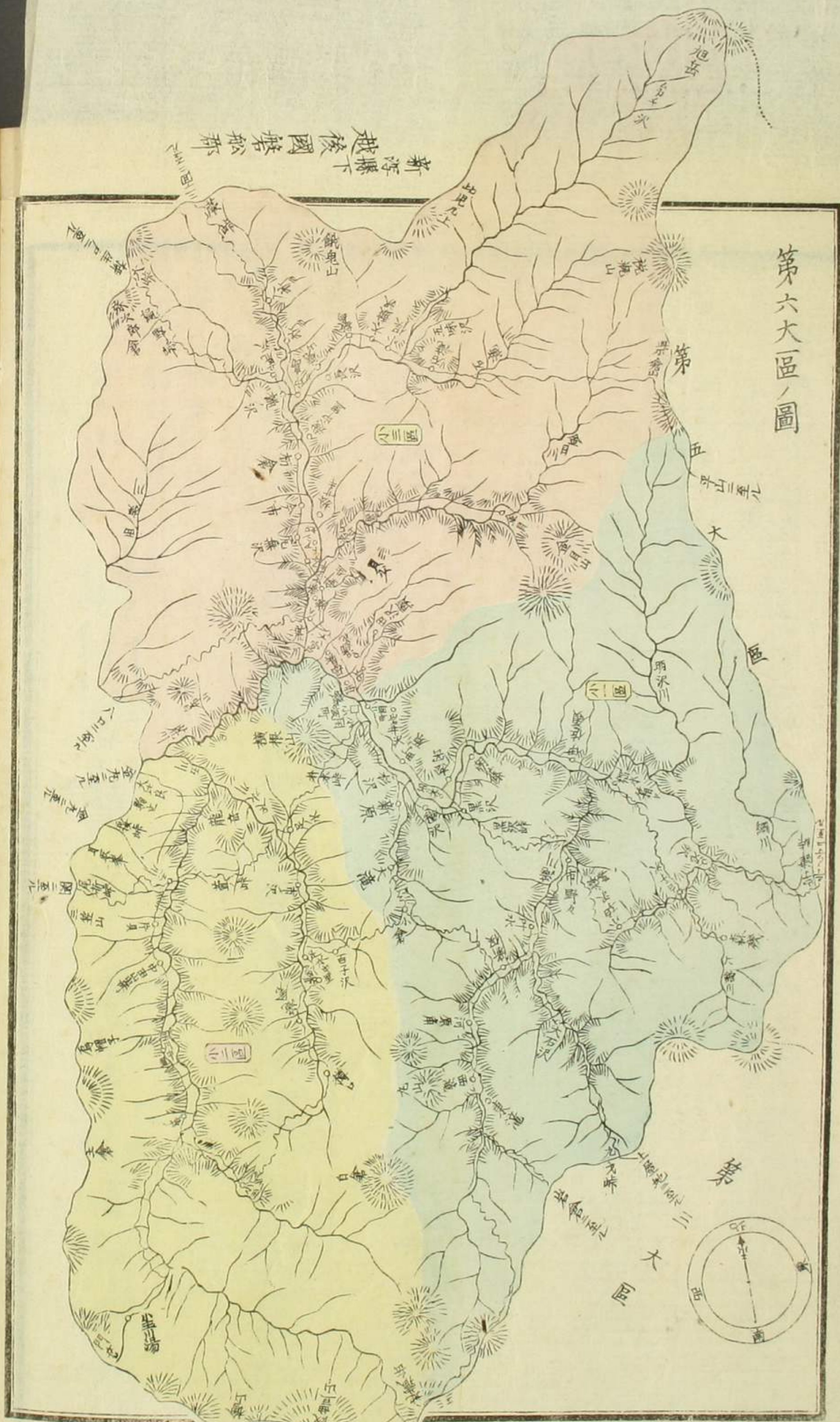
越後え通ふ要路なる第六  
 大區其系況も巽と申二良  
 の方は冬面を五大區又為小  
 冬新潟其縣に屬と蒲原  
 と磐船郡に打續き四續

里名和方

冊一



第六大区ノ圖



吾妻湯 太平村新  
 古武ヶ所あり古  
 ハ泉質明礬切瘡  
 子宜く新ハ泉質  
 銀氣上衝眼疾亦  
 子好し  
 五色湯 板谷村新  
 古ニケ所泉質刺  
 篤亞斯婦人月經  
 不順或ハ酸敗症  
 子好し  
 滑川湯 板谷村中  
 ケ所泉質明礬脚  
 氣切瘡ニ宜し  
 姥湯 板谷村一ヶ  
 所質明礬綠礬混  
 才腸胃衰弱病子  
 善し

越後ノ通ル要路なる第六  
 大区ハ其況も異々中三良  
 の方は冬面中五大臣又海小  
 冬新潟縣ニ屬し其浦原  
 と磐船郡ヲ打撻キ四鏡子





赤湯 赤湯村四ヶ  
 所大湯尾湯丹波  
 湯森の湯寺ふり  
 大湯尾湯ハ泉質  
 硫黄麻痺病、疝腹  
 赤ト宜しく丹波  
 湯ハ質銀塩上衝  
 眼疾ホト良く又

森の湯ハ質塩泉  
 疾瘡ト宜し  
 小玉川 小玉川村  
 赤ト所泉質硫黄  
 中風脚氣症ホ  
 ト宜し  
 以上泉質唯土  
 俗の所説ト仍  
 ト経験未詳  
 瀑布  
 相生滝 太平村ト  
 あり松川の源を  
 り高サ三丈幅三  
 間  
 火能滝 同村トあ  
 り松川の水源高  
 廿丈幅九間

峻壑<sup>しんがく</sup> 峻峽<sup>しんがく</sup> 峻峽<sup>しんがく</sup> 峻峽<sup>しんがく</sup> 峻峽<sup>しんがく</sup>  
 霜<sup>しも</sup> 霜<sup>しも</sup> 霜<sup>しも</sup> 霜<sup>しも</sup> 霜<sup>しも</sup>  
 之土性<sup>ちのちせう</sup> 薄弱<sup>はくじやく</sup> 産物<sup>さんぶつ</sup> も 缺<sup>かへ</sup> 乏<sup>ひそ</sup>  
 多<sup>おほ</sup> 多<sup>おほ</sup> 多<sup>おほ</sup> 多<sup>おほ</sup> 多<sup>おほ</sup>  
 日<sup>ひ</sup> を 陟<sup>のぼ</sup> る 七拾<sup>しちじふ</sup> を 此<sup>こゝ</sup> 村<sup>むら</sup> 北<sup>きた</sup> 落<sup>おち</sup> を

三ツの山<sup>さん</sup> 源<sup>げん</sup> を 振<sup>ふる</sup> 分<sup>わ</sup> け け 次<sup>つぎ</sup> 弟<sup>にい</sup>  
 に 總<sup>すべ</sup> る 如<sup>ごと</sup> く も 三<sup>さん</sup> 津<sup>つ</sup> の 嶺<sup>ね</sup> 乃<sup>なり</sup>  
 邊<sup>へ</sup> り 糸<sup>いと</sup> 糸<sup>いと</sup> 沼<sup>ぬま</sup> 澤<sup>さわ</sup> 森<sup>もり</sup> 残<sup>のこ</sup> り 白<sup>しろ</sup> 子<sup>こ</sup> 澤<sup>さわ</sup>  
 そ 右<sup>みぎ</sup> 山<sup>やま</sup> 途<sup>みち</sup> を 銀<sup>ぎん</sup> 木<sup>ぎ</sup> 箱<sup>ばこ</sup>  
 口<sup>くち</sup> 伊<sup>い</sup> 波<sup>は</sup> 飲<sup>いん</sup> 部<sup>ぶ</sup> 又<sup>また</sup> 本<sup>ほん</sup> 多<sup>た</sup> 多<sup>た</sup> を 小<sup>こ</sup> 白<sup>しろ</sup>



燕滝 太平村あり  
 松川の水源高  
 井大幅十間  
 嶮急滝 同村あり  
 松川の水源高  
 さ六丈幅四尺  
 布引滝 板谷村あり  
 あり前川に注ぐ  
 高さ六十三丈幅  
 四尺  
 大滝 同村同川に  
 注ぐ高さ廿丈幅  
 十間  
 三階滝 同村同川  
 の源高十丈幅二  
 間  
 潜竜滝 関村あり  
 大樽川の源高

子海布野に於ては峠路の  
 黒沢むしり新橋をくわむ  
 芥出町系也小國に於ては岩  
 井海横川に瀨に架け渡す  
 大橋越えく小坂界に生南

七丈二尺幅一間  
 半  
 梅花皮滝 小玉川  
 村あり玉川に  
 注ぐ高二十丈幅  
 二間余  
 旭厩滝 同村同川に注  
 ぐ長四丈余幅二間



小倉新保大石澤川系角  
 叶水東西に滝むらむで  
 小倉源あり飯豊乃山麓  
 崎嶇羊腸の甘中に出地



東京及び隣縣其  
他の距里

但し縣廳の位  
置より起算す

東京 八十二里二

十七町五十二間余

若松 十六里五丁

五十一間

新潟 卅六里十三

丁五十九間

福島 十一里卅四

丁卅一間

山形 十二里十丁

六丁間余

西京 東海道二百

十二里卅二丁五

間  
北陸道百九十八

里之方

をとりぬる小三原朴木萱

野尾折れる三川の峠は狭ま

れ一足水玉川長具也中

田山崎玉川の中里道く泉

岡小玉川橋口漲る也菅

里一丁十間

大坂 二百六三里

四十五間

長寿 四百六里一

丁五十六間

箱館 百三十八里

丁三丁

學区

第六大学区二十番

中學区二百十二小

學区

軍管

仙臺鎮臺青森營所

旧石高

二十九万五千六百

沼村十百子沢足ふ中里市

野津皆山皆沢僻地有利

蒼より少之立海り朝日山辺

小三原西むく北木湯花より

田沼頭也金目郡古田若山

里之方

世四



七十一石五斗四升  
三合

地租改正及別  
十八万五千三百九  
十六町四及六畝一  
升

全地價

六百九十九万九千八  
百八円六十六钱

士族の數

六千〇五人

社寺の數

社二百四十  
寺四百三十八

経緯

杣寄に城中里也長津の川

此向ひに鷺野に生束糸不

去被澤小俣五味沢石沢の

西より一ノ中崎焼山折

戸入折戸荒津極中沢柄

倉君と今市邨に尻無津細代

津舟渡針生お新屋表小沢

増屋大石村の居も掃まら

貝少村是管轄の界り也

北緯 三十七度四

十分子起り三十一

西經 八度二分終る

東經 度七分

三十秒二終る

但し即今之を  
實測する其人  
は是れ故に唯  
其概算を算る  
のみ



里之夫之

# 版權免許

明治九年五月九日

東京府士族  
明珍宗周甥

櫻井敬長

置賜縣第一區二小區  
元籠町三十六番地寄留

著者

置賜縣下大町

正札附小間物店

平民  
九里忠兵衛

發兌

第一區一小區  
百三拾五番地

# 取次所

同立町

辰巳屋吉三郎

同宮内新町

辰巳屋榮五郎



